

太田先生の師について

岡田成幸

地震学会に投稿した追悼文「太田裕先生を偲んで」をご高覧頂いた先生方から、感想をお届け頂いています。「岡田は、良い師に出会いましたね。」という一文と共に「その伝統を是非伝えていって下さい。」という檄文が添えられています。有難いお言葉であり襟を正して受け止めております。しかし私とその任に相応しいかどうか迷うところも多かったのです。私が太田先生から一対一による直接指導を受けたのは、卒業論文の「やや長い周期の全国地盤特性ゾーニングマップ」で、その後は研究室のグループ研究の一員としての扱いであったように感じており、当時の私は太田先生の核心部分に届かないもどかしさを払拭しようと、太田先生をやや遠目に雑談や会話の中から太田先生の哲学(太田イズム)の真義に触れようと必死であったように思います。

そんな折、感想をお寄せ頂いたお一人である林能成先生(関西大学教授)から「追悼文には島津康男先生について触れていないが、追悼文を読んで島津先生と太田先生には共通点がかなり認められる。両先生の関係について何か知っているか」との問合せが付帯されており、それに回答したメール文が以下のものです。太田先生が島津先生を師と仰ぎ、そのエッセンスを我々の世代に伝えていてくれたことを改めて知り、感謝と共にここに記します。

*****岡田からの林能成先生へのメール*****

2024年4月28日

岡田成幸

林先生

メール有り難うございます。

太田先生の追悼文に対して、私よりも若い方から感想をお届けいただいたことに驚きつつ、少なからぬ喜びを感じております。太田先生を直に知っている研究者は今や少なくなり、また退職した私から学生や若い研究者に太田哲学を語ったところで、時代錯誤とのまなざしにこちらが戸惑うことも多々経験していたところだからです。林先生からのメールは、何度も読み返させていただきました。

私は一度だけ、島津先生とお会いしたことがあります。名大で島津先生のお弟子さんの一人であった山本さんという方が、北大理学部助手に赴任されてきたときに、たまたま島津先生が北大においでになっていて、お二人で太田先生の研究室を訪問されてきました。その時に傍らに同席させていただきました。直接島津先生とお話したかどうか、記憶にありませんが、威風堂々とした立ち居振る舞いは覚えています。

島津先生のことは、太田先生の講話の中にも何度も出てきていました。太田先生が名古屋大学の学生であったとき、形式上の指導教授は飯田汲事先生と聞いております。あのハザードの経験式で有名な「石本-飯田の式(Gutenberg-Richter 式と同型ですが、G-R 式は seismicity の経験式)」の飯田先生です。しかし太田先生は、いつも自分の師は島津先生(当時は島津助教授)だと仰っていました。林先生からご紹介の文献に、太田先生がいつも口にしていた「シームレス」「一人学際」は島津先生が元祖であったことを、恥ずかしながらはじめて知りました。太田先生の頭の中には、島津先生がいつも生きていらっしやっただけだと胸が熱くなりました。

太田先生が北大で我々を指導していたときのスタイルを思い返すと、ご紹介の島津先生回顧録(参 1,2)「SMLES 奔る(1)1966年 SMLES がスタート」に書かれている「SMLES グループ内規」そのままです。私はできの悪い学生でしたのですぐに見切られましたが(内規 7: 要求を満たし得ないと判断された者は除名される。)、先生の目になつた学生には徹底的に厚い指導が施され、それを傍らで眺めつつ自分自身に課していた駆け出し研究者の頃を思い出しました。太田先生は名大でのご自身の卒論テーマについて「地震学の教科書を執筆する」と教授に申し出たそうです。学部4年生にしてこの発言は、まさに「SMLES グループ憲章1: SMLES は、細分化し形骸化した地球科学の教育・研究の現状に満足せず、総合的に自然現象をみる第三世代の地球科学を志す。」そのものであり、島津精神の信奉者であったことがよく分かります。

太田先生はこんな事を話してくれたことがあります。島津先生は思いついたことをノートに書き留めていた。あるとき、島津ノートがゴミ箱に捨ててあるのを見つけ、こっそり拾ったことがある。そこにはどのようなことが記されていたのか、内容までは聞いていませんが、太田先生がうれしそうに、そして懐かしそうに話すのを何度か見るにつけ、多くのヒン

トを島津ノートからかぎ取ったのではないかと、私は勝手に推察しています。

ご紹介の林先生の「島津先生オーラルヒストリー」の中で、新しい研究テーマに踏み出すには、近い年齢差の先輩の存在の影響の大きさを仮説として披露されていましたが、私も同意致します。太田先生には、青木治三先生、熊澤峰夫先生という二人の年齢差の小さい先輩がおられ、名大時代には太田先生を含めて名大三羽がらすと謳われていました。お三方が互いに切磋琢磨され、それぞれに活躍の場を見つけ成果を上げられてきたのを拝見し、現在多く指摘される大学院重点化に伴う「教員への業務負担」に加え、林先生ご指摘の「年齢差の少ない先輩・同輩の存在が消える現実」にも日本の研究環境の危うさが隠されているのかもしれないと、新しい視点に納得しました。新しいテーマへのチャレンジ精神が年齢差が小さいことで鼓舞されることに加え、人材の分散化促進にも寄与していたのではないかと言うことです。太田先生にとっては、ほぼ同期の先輩が二人もいては名大に職場としての研究の場は探しにくかったはずですが、しかしそのことが優秀な研究者を各地域に分散させることに繋がり、私と太田先生との接点を与えてくれたことに繋がっています。

熊澤先生の島津先生評の資料^(※ 3)の中に、都城秋穂著「科学革命とは何か(岩波書店)」が引用されていました。この本は、私も参考になっている著書であり、意外な場での接点に興味を持ちました。太田先生からは文理融合の話は出てきますが、科学哲学の話は出てきたことはありません。太田イズムを引き継ぐ者として、太田イズムは現状の批判的分析力を研究発端の強力な駆動力にしている一方で、科学史的超克ベクトルの欠如を認めざるを得ず、新しい視座を模索している中で、私は科学哲学に出会いました。学生への講義のイントロの中で、リスク社会と科学技術について講義しています。アリストテレスから始まり、16～17世紀の科学革命が科学技術の潮流を決定づけ、そしてユンガーやアーレントの西洋科学技術批判、鈴木大拙による大乘仏教的自然との妙有解釈など科学技術の行く末を語らずに、リスクを論じるのは表皮的との自説から、若者には科学哲学的バックグラウンドを身につけて欲しいし、そこを基盤とすることで太田イズムをより深く理解できるし、してもらいたいとの思いからです。しかしすでに、熊澤先生がその下地を固めていたのです。これも島津精神の一端なのでしょう。そうであるなら、私も島津精神を受け継ぐ孫弟子に入れてもらえないか、と遅ればせながら太田先生にお願いしてみようかと、林先生のメールを読みながら思った次第です。

熊澤先生のメモの中に、気になる言葉を見つけました。[最近の歴史 1]の頁に、(2)懸案の「二つの文化」(スノウ)とあります。これは、C. P. スノーが提唱した「二つの文化論」すなわち科学的文化と文芸的文化の衝突(理系と文系の衝突)に関する論考を始めたと言うことなのでしょう。そうであるなら、この行方はどうなったのか、林先生はご存じでしょうか。私もこれに関してはスノーの一方向的な見方に異論を持っています。何か情報をお持ちでしたら、ご教示願えないでしょうか。

参考論文:

参1: 島津先生による回顧録

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jriet1972/33/1/33_1_86/_pdf/-char/ja

参2: 島津先生インタビューの林先生による報告

<https://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/hapyo/16/pdf/P04.pdf>

参3: 熊澤先生による島津先生評

http://spxs.org/pdfs/sps_kenkyuu_20130126_kumazawa

*****岡田からの林能成先生へのメールはここまで*****

林先生からは文中の参考論文にあるように、島津先生に関する情報を教えて頂き、太田イズムの構築足跡を辿ることができました。メール文中では、太田先生は事実や史実を重んじる実証主義的方法論を先導してきたかの記載を致しましたが、東日本大震災を契機として先生の内部にはある種のパラダイム転換が起こったのではないかと推察しています。そこから匂い立つ太田イズムの核心は道義や倫理観の構築を軸に置く研究のとらえ方(反実証主義)にあるのかもしれないと、私自身思い始めてもいます。これは気づきであり未だ確信には至っておりませんが、その部分については偲ぶ会の中でお話しさせていただきます。太田先生とずっと議論を交わしたかった。メール文の最終パラグラフはその余韻ですが、林先生からはこれについても丁寧に返信頂いております。